聖日集会　聖書講筵

世の罪を除く神の羔羊、聖霊にてバプテスマする者

１９９３年1月24日

奥田 昌道

キリストの受けられたバプテスマ　道を備える者、ヨハネ　悔い改めの備え　イエスの出現
世の罪を除く神の羔羊　十字架による贖い　主の御業

●キリストの受けられたバプテスマ

今年は福音書を中心にお話をしたいと思っています。先週は福音書から、

「主は我が牧者なり」

と題して、復活のキリストをお話しました。「主は我が牧者」ということは、ラザロが復活させられた記事のように、我々が肉体的に不老不死の人間になるということを言っているのではありません。ラザロに起きた出来事については、

「人間は死で終わりだ、これで絶望だ。他のことはみんなできても、死だけは主イエスといえどもどうしようもなかったのだ」

という、人々の嘆きの声がありました。

「あの盲人の目を開けたイエス様ですら、死人を前にしてはどうにもできないんだ」

と。それに対してイエス様は、

「神様の前に不可能ということはない。これで終わりという絶望はない。死を突破して、死を飲みつくした永遠の生命の光が輝いているのだ」

ということをラザロの復活を通して教えて下さいました。

「これだけはもうどうにもならない、万事休す」という絶望というものを主は打ち砕いて、

「私たちに、常に光りだよ、常に生命だよと、相対的な私たちの生命を越えて本当に生きて働く永遠の生命、それ以下のものを神様は与えられないのだ」

と教えて下さいました。

主イエスに出会った者にとって何が幸いかというと、それなのです。人生で「これでだめだ」という絶望を主はぶち破って下さいました。このことが本当に感謝であります。ところで大切なことは、その大きな恵みを下さるのに、主ご自身がいかほどお苦しみ下さったかということです。

「この火すでに燃えたらんには、我また何をか望まん。されど我には受くべき〔血の〕バプテスマあり」（ルカ12・49～50）

聖霊の火は、永遠の生命の火なのですが、この火を私たちに燃やしむるために、自分が

いかほど苦しまねばならないかと言って、十字架を我々に現して下さっていたのが、この主の言葉なのです。

そして、シメオンは赤ちゃんのイエス様を抱いたマリアさんに対して、

「この幼児は多くの人の倒れ、あるいは起たんために、また言い逆らいを受ける徴のためにこの世に置かれているのです。マリアさん、あなたの心も剣で刺し貫かれますよ」（ルカ2・34～35）

と不吉なことを言いました。あのシメオンは、「キリストに出会うまでは地上を去らない」という示しを受けていた。だから、主イエスに会った喜びだけで、喜びに溢れてさようならと言って天に昇って行きたかったでしょうが、あの不吉な言葉を一つ残さざるを得なかった。これは、ものすごい人生の重みというか、この世の重みです。しかしそれを、主イエスは本当に体で受けとって下さった。ですから、ここは非常に重いところです。

●道を備える者、ヨハネ

マタイ伝では多くの幼児が犠牲になっています。ヘロデが自分の王座を守るために、キリストという王者が出てくるのを恐れて、その年頃の男の子を全部殺したという記事が出ています。それから、ヨハネ伝へまいりますと、1章の冒頭のところはキリストが来て下さったことの霊的な意味がどんなに深いものであるかという、霊的な次元でのイエス・キリストを送り給うた神の奥義が書かれています。それに続くものがさきほど読んでいただいたヨハネ伝1章19節からです。ヨハネ伝の記事は、他の三つの福音書とかなりかけ離れていまして、順を追っていない。三つの福音書を共観福音書といいます。それに対してヨハネ伝だけはちょっと別の角度で見ており、切り離されている。このように三つを並べますと、それぞれに特色がありまして、また、得るところも大きい。一冊の福音書ですと、どうしてもあちらにひっくり返し、こちらにひっくり返しているうちに見逃すところが出てきます。歴史的に言えば、マルコ伝福音書が一番先に簡潔に記され、これをベースにしながら、マタイ伝、さらにいろいろな資料を基にしてルカ伝が書かれ、ヨハネ伝はかなり遅れて記されたといわれています。しかも、マタイ伝はユダヤ人の読者を第一に念頭において、旧約聖書との関わりに深く留意しています。「旧約聖書ではこうである。しかし、キリストにあってはこうだ」と、旧約聖書のいろいろな言葉との対応関係が出てまいります。ルカ伝の筆者は、異邦人伝道者であり、パウロと終始行動を共にしたルカですので、旧約聖書のことは出てきません。おおざっぱにいえばそういう大きな特徴がありますが、キリストが伝道を始められる初めのところは、非常にどれも似ています。やはり、ルカ伝が一番詳しく書かれています。

まずは、ルカ伝の方から見て行きます。もちろん、私たちは内容的なところに深く心を留めたいと思いますので、あまり歴史的な意味は周辺的なことにしておきたいと思います。

「神の言、荒野にてザカリヤの子ヨハネに臨む。かくてヨルダン河の辺なる四方の地にゆき、罪の赦を得さする悔改のバプテスマを宣伝う。預言者イザヤの言の書に『荒野に呼わる者の声す。「主の道を備え、その路すじを直くせよ。もろもろの谷は埋められ、もろもろの山と岡とは平げられ、曲りたるは直く、険しきは坦かなる路となり、人みな神の救いを見ん」』と録されたるが如し」（ルカ3・2～6）

この「神の言」というのはルカ伝には出てきますが、他の福音書にはありません。マルコ伝では第1章からすぐに、

「神の子、イエス・キリストの福音の始」

とあります。それまでのイエスのご誕生であるとか、荒野に現れられるまでのことは一切書かれていません。公の伝道の生涯に乗り出された時から始まっています。そして、

「預言者イザヤの書に、『視よ、我なんじの顔の前に、わが使いを遣わす、彼なんじの道を設くべし。荒野に呼わる者の声す「主の道を備え、その路すじを直くせよ」』と録されたる如く、バプテスマのヨハネ出で、荒野にて罪の赦しを得さする悔改のバプテスマを宣伝う」（マルコ1・2～4）

ヨハネの宣教の内容が、

「主の道を備え、その路すじを直くせよ」

という、預言者イザヤのみことばに立脚していることは、三つの福音書に共通しています。しかも

「我なんじの顔の前に、わが使いを遣わす」

と、ヨハネはキリストの前に道を備える者として、神様から遣わされたお方であるということが、はっきりとしています。自分の意志で現れてきたのではない。ヨハネの天命は授かりし使命です。ひとえに

「主の道を備え、その路すじを直くする」

という使命に徹しています。それはヨハネ伝も同じです。

「『なんじは誰なるか』、『我はキリストにあらず』。『かの預言者なるか』、『否』。『バプテスマを施すなんじは誰なるか』、『我は預言者イザヤの云えるが如く「主の道を直くせよと、荒野に呼わる者の声」なり』」（ヨハネ1・19～23）

はっきりと自分の使命を自覚してそれに徹し、主の役割を横取りしていません。ルカ伝では、

「罪の赦を得さする悔改のバプテスマを宣伝う。……人みな神の救を見ん」（イザヤ52・10参照）

マタイ伝では、

「汝ら悔改めよ、天国は近づきたり」

マルコ伝では、

「罪の赦を得さする悔改のバプテスマを宣伝う」

とあります。どれにも共通しているのは、

「時は満ちてきた。これは神の恵みの御業である。これは上から来ていることだ」

ということです。人の側で一体、何ができるのか。人はその用意をすることだ。

「どんな用意をするのか。悔い改めることだ」

と言っています。悔い改めの内容は、この後にルカ伝、マタイ伝において人々に対する非常に激しい叱責の言葉で表されていますが、要は、

「本当に神様の側に向き帰れ、立ち帰って来い」

と。旧約聖書で「シューブ、立ち帰れ」という、

「神様の方に向きを変えろ、立ち帰れ」

ということです。

「天国は近づいた。天国は迫っているのだから、人みな神の救を見ん」

です。

●悔い改めの備え

「さてヨハネ、バプテスマを受けんとて出できたる群衆にいう『蝮の裔よ、誰が汝らに、来らんとする御怒を避くべき事を示したるぞ。さらば悔改に相応しき果を結べ。なんじら「我らの父にアブラハムあり」と心のうちに言い始むな。我なんじらに告ぐ、神はよく此らの石よりアブラハムの子等を起こし得給うなり。斧ははや樹の根に置かる。されば凡て善き果を結ばぬ樹は伐られて火に投げ入れらるべし』」（ルカ3・7～9）

続々とヨハネの許にバプテスマを受けようとやって来る群衆に、

「蝮の裔よ、来たらんとする神の審判を避くべき事を誰が示したか。おまえたちは心の中で私たちの先祖にアブラハムがいてくれるから安泰だと。血統を誇り、アブラハムの功績が即自分たちの功績だと考え、我々は大丈夫だと思うな。神は、これらの石ころより、すなわち、何も持たざる者、異邦人、あるいはおまえたちが罪びとだと烙印を押して救いから外そうとしている人たちの中から、アブラハムの子等を起こし給うのだ。おまえたちは何か思い違いをしているのではないか。おまえたちの中、誰が神の国を受け継ぐことができるというのか。おまえたちはその資格が何かということについて、ずいぶん思い違いをしている」

と言っています。ヨハネ伝でも

「かかる人〔神の国を受け嗣ぐ人〕は血脈によらず、肉の欲によらず、人の欲

によらず、ただ神によりて生まれしなり」（ヨハネ1・13）

とありました。

次に、マタイ伝をみますと、ヨハネはどんな人かということが出てきます。

「**このヨハネは駱駝の毛織衣をまとい、腰に皮の帯をしめ、いなごと野蜜とを食とせり、ここにエルサレム及びユダヤ全国、またヨルダンの辺なる全地方の人々、ヨハネの許に出できたり、罪を言い表し、ヨルダン川にてバプテスマを受けたり**」（マタイ3・4～6）

ちょっと普通の宗教家とは違うわけです。しかし、非常に権威がありますので、皆ヨハネの許にやって来ました。

「**ヨハネ、パリサイ人およびサドカイ人のバプテスマを受けんとて、多く来るを見て、彼らに言う『蝮の裔よ、誰が汝らに、来らんとする御怒を避くべき事を示したるぞ。さらば悔改に相応しき果を結べ』**」（マタイ3・7～8）

内容は一緒ですが、対象は、マタイ伝では特にパリサイ人、サドカイ人に対してこの言葉が向けられています。ルカ伝では群衆という全部をとらえています。むしろ、マタイ伝では、

「**エルサレム及びユダヤ全国、またヨルダンの辺なる全地方の人々**」

というなれば正直で素朴な人々に対しては、ヨハネは何も言わず、パリサイ人およびサドカイ人に対してヨハネの叱責の言葉が向けられています。キリストも、

「**パリサイ人のパン種に気を付けろ、サドカイ人のパン種に気を付けろ**」

とおっしゃいましたが、人の中のどういう点が神様に逆らっているのかということを、マタイ伝はするどく突いているわけです。それはパリサイのパン種、サドカイのパン種、ということになります。パリサイ人は己が律法、己が宗派、自分の清さ等に誇りを持っています。サドカイ人の方は非常に文化的でありまして、「復活なんかない、天使なんかいない」というふうにして、霊界のことを人の頭の理解の枠内に入るように、都合よく組み立て直そうとするギリシア的な影響を受けた宗派なのです。だから、現代流に言うならば、非常に文化的であり、学者的であっても、霊の世界のことについては盲目である。心を開こうとしない。あるいは宗教的に自分の宗派、霊的体験とかを誇りとして本当にキリストの恵みを無条件に受けるということをしない。どちらも人間の何かをより所として、神の国を我が物にできると思うような人たちということになります。

「**汝ら『われらの父にアブラハムあり』と心のうちに言わんと思うな。我なんじらに告ぐ、神は此らの石よりアブラハムの子らを起こし得給うなり。斧ははや樹の根に置かる。されば凡て善き果を結ばぬ樹は、伐られて火に投げ入れらるべし**」（マタイ3・9～10、ルカ3・8～9）

ここまでは一緒です。ルカ伝では、群衆、取税人、兵卒との問答が出てきます。具体的です。

「**群衆ヨハネに問いて言う『さらば我ら何を為すべきか』答えて言う『二つの**

下衣をもつ者は、有たぬ者に分け与えよ。食物を有つ者もまた然せよ』（ルカ3・10～11）

「悔い改め、良き果を結べ」

と言われる。一体どうしたらいいのですか。「愛の行為」ですね。群衆に対してはいわゆる難しい律法の問題ではなく、

「本当に愛の行為と憐れみをお前は持っているか。自己中心ではなく、本当に神の心を心とせよ」

というお答えです。

「取税人もバプテスマを受けんとて来りて言う『師よ、我ら何を為すべきか』答えて言う『定まりたるものの外、なにをも促るな〔催促するな〕』」（ルカ3・12～13）

ついつい強欲な取り立てをして、私腹を肥やす。取税人が税金を取るというのは職務だから仕方がないが、職務に忠実であれ、自分の私利私欲を計るなと、言ったわけです。

「兵卒もまた問いて言う『我らは何を為すべきか』答えて言う『人を劫かし、また誣〔ぬれぎぬ〕い訴うな、己が給料をもて足れりとせよ』」（ルカ3・14）

彼らは権力を笠に着て民衆を抑圧したり、掠め取るといったこと無きにしもあらずです。

「民、待ち望みいたれば、みな心の中にヨハネをキリストならんかと論ぜしに、ヨハネ凡ての人に答えて言う『我は水にて汝らにバプテスマを施す。されど我よりも能力ある者きたらん。我はその鞋の紐を解くにも足らず。彼は聖霊と火とにて汝らにバプテスマを施さん。手には箕を持ちたもう。禾場をきよめ、麦を倉に納めんとてなり。しかして殻は消えぬ火にて焚きつくさん』」（ルカ3・15～17）

ヨハネは何のためにバプテスマを施しているのか、ずばりと言いました。

「神の審判の時が迫っている。だから全生活を引っ繰り返せ」

と。引っ繰り返す徴として水のバプテスマを行う。これは「悔い改めのバプテスマ」といわれます。今までの生活を引っ繰り返して、神へ返り向かう悔い改めのバプテスマ、それが水のバプテスマです。マタイ伝も同じです。

「我は汝らの悔改のために、水にてバプテスマを施す。されど我より後にきたる者は、我よりも能力あり、我はその鞋をとるにも足らず、彼は聖霊と火とにて汝らにバプテスマを施さん」（マタイ3・11）

これは、人間の側でできる備えを水のバプテスマという姿で現しています。後からおいでになる方は聖霊と火でバプテスマを施し給う方です。

「人間の側の心の引っ繰り返り、改心、心の向きを神様に変える。それをおまえたちはやれ。そうすれば、神様の方から恵みが臨んでくるぞ」

と言った。

「**手には箕を持ちて禾場をきよめ、その麦は倉に納め、殻は消えぬ火にて焼きつくさん**」（マタイ3・12）

これは、最後の審判です。神のみ心に適う者は倉に納める、すなわち天国に迎えられ、そうでない者は消えぬ火、永遠の火で焼き尽くされるという、審判です。マルコ伝は簡潔に、

「**我よりも力ある者、わが後に来る。我は屈みて、その鞋の紐をとくにも足らず、我は水にて汝らにバプテスマを施せり。されど彼は聖霊にてバプテスマを施さん**」（マルコ1・7～8）

そしてマルコ伝もマタイ伝も、人々がやって来て罪を言い表したとあります。告白、カトリックでは告悔という制度があります。犯した罪を神父さんの前に告白する。我々は特にそのようなことはやっていませんが、神様の前に罪を言い表し、御赦しを受けるというのは、大事な角度です。

「**罪を言い表し、ヨルダン川にてバプテスマを受けたり**」（マタイ3・6、マルコ1・5）

自分を吐き出す。そして、それを受けとってヨハネはバプテスマを施しました。ヨハネは、人が罪を告白する、それに対して水のバプテスマを授けることによって、一緒に神様の前に立っているわけです。水のバプテスマという形で、罪の告白、悔い改めを認証いたしました。

「どうぞ、主よ、後は恵みによって御処置下さいませ」

というふうに、ヨハネは一人ひとりにバプテスマを施しながら、自分も神の前に一緒になって赦しを請うという角度です。だから、ヨハネにしてみたら、素朴な群衆に対しては、心は暖かいわけです。

ところが、パリサイ人やサドカイ人といった宗教の専門家に対しては、彼らの根性が直らないことには、口先で罪を言い表そうが何をしようが、一緒になって神様の前に執り成してやれるものかという気持ちが、どうしてもあるのでしょう。だから、救いということは、宗教家ほど難しい。そして、

「私の役目はこの水のバプテスマだ。しかし、私の後にいらっしゃるこのお方こそ、聖霊と火であなた方にバプテスマを施して下さる方だ」

というのです。もう一度ルカ伝から見ていきましょう。

「**ヨハネこの他さまざまの勧をなして、民に福音を宣伝う。しかるに国守ヘロデ、その兄弟の妻ヘロデヤの事につき、又その行いたる凡ての悪しき事につきて、ヨハネに責められたれば、更にまた一つの悪しきことを加えて、ヨハネを獄に閉じこめたり**」（ルカ3・18～20）

これは大分後のことですが、先にこんなことをルカ伝では書いてしまっています。ヨハネ

がいろいろな叱責をしたのは群衆のみならず、どんな地位にある人であろうと、すべての人に対してそれぞれに罪を叱責したということです。

●イエスの出現

「民みなバプテスマを受けし時、イエスもバプテスマを受けて祈りい給えば、天ひらけ、聖霊、形をなして鳩のごとくその上に降り、かつ天より声あり、曰く『なんじは我が愛しむ子なり、我なんじを悦ぶ』イエスの、教えを宣べ始め給いしは、年おおよそ三十の時なりき。人にはヨセフの子と思われ給えり」

（ルカ3・21～23）

マタイ伝を見ますと、

「ここにイエス、ヨハネにバプテスマを受けんとて、ガリラヤよりヨルダンに来り給う。ヨハネ之を止めんとして言う『われは汝にバプテスマを受くべき者なるに、かえって我に来り給うか』」（マタイ3・13～14）

これがヨハネの心です。ヨハネはイエス様のために、

「自分は道を備え、こうして民にバプテスマを施しています。一人ひとりが本当に悔い改め、方向転換をしてあなたのいらっしゃるのを待つ。あなたの御業を待つ、その備えをしています。その御本体であるあなたが来られた。私もあなたの前に悔い改めをして、あなたから聖霊のバプテスマをいただきたい。そういう気持ちで今ここにいます。その私があなた様に水のバプテスマを施すなんて、とんでもないことです。あなたは水のバプテスマを必要となさらない。神から遣わされたお方ですから」

と、ヨハネは本当に謙虚にそう申しました。

「我は汝よりバプテスマを受くべき者であるのに、かえってあなたが私のところに来り給う、これは逆ですよ」

と。ところが、

「イエス答えて言いたもう『今は許せ、われら、かく正しき事をことごとく為遂ぐるは、当然なり』ヨハネ乃ち許せり。イエス、バプテスマを受けて直ちに水より上り給いしとき、視よ、天ひらけ、神の御霊の、鳩のごとく降りて己が上にきたるを見給う。また天より声あり、曰く『これは我が愛しむ子、わが悦ぶ者なり』」（マタイ3・15～17）

「イエス、ガリラヤのナザレより来り、ヨルダンにてヨハネよりバプテスマを受け給う。かくて水より上るおりしも、天さけゆき、御霊、鳩のごとく己に降るを見給う。かつ天より声出づ『なんじは我が愛しむ子なり、我なんじを悦ぶ』」（マルコ1・9～11）

三つの福音書に共通して出てくるということは、とても大事であることがよく分かりますね。ヨハネは、

「**主の道を備え、その道筋をまっすぐにせよ**」

という、使命に忠実に人々にバプテスマを施していました。ヨハネは、さっきも言いましたように、人々にバプテスマを施しながら、執り成しをしています。そういう気持ちで神の前に立っているわけです。そこへイエスがやって来られました。イエスもやはりバプテスマを受けなければならない。

「ヨハネよ、お前だけではない。私も一緒に受けて、人々の悔い改めを本当にしっかりと担(にな)うよ」

と言われた。人が心から反省し、心から悔い改めることは大事なことです。しかし、それで何かなるのでしょうか。このルカの福音書にもマタイの福音書にも、

「**私はあなた方の悔い改めのために水でバプテスマを施すが、後から来たる方は聖霊でバプテスマを施す**」

とあります。人の側の悔い改めが、今度は聖霊と火のバプテスマの前提になっています。「いや、本当にそうなのでしょうか」ということですね。人が悔い改めて罪を表してバプテスマを受ける。すると神様は

「よしよし、分かった」

と言って、聖霊でバプテスマを施す。もし、これがストレートにいけるならば、主さまの十字架はいらない。主さまはあのように伝道してみことばを語られ、御業(みわざ)をなさり、人々は喜びました。けれども、「人の罪」という根っこは、それで片がつくような簡単なものではありません。弟子でさえ、聖霊のバプテスマを受けていない。弟子でさえ、心はキリストから遠い。人々が真剣に悔い改め、罪を告白し、神の怒りが迫っているからと、青ざめてヨハネのところにやって来て、

「本当にどうしたらよいのですか」

と尋ねます。ヨハネは、

「こうだよ、ああだよ」

と言い、人々は、

「はい、分かりました」

と言ってバプテスマを受けています。しかし、それだけのことを人がやったとしても、すぐ聖霊というわけにはいかないのです。ここのところをしっかり受けとりたい。

それでイエス様はなぜ、自らバプテスマを受けて下さったのでしょうか。人々の悔い改めでは足りない。心根は良いがそれでどうかなるものではない。

そこで、悔い改めを必要としないイエス様が、ヨハネの前で身代わりに、バプテスマを受けて人々の悔い改めを背負って下さっています。しかし、それでもなお足りない。そこで、

十字架が問題なのです。

これをしっかりつかまえてくれたのが、ヨハネ伝第1章です。

●世の罪を除く神の羔羊

「明くる日ヨハネ、イエスの己が許にきたり給うを見ていう『視よ、これぞ世の罪を除く神の羔羊』（ヨハネ1・29）

「世の罪を除く」、これは人の側の悔い改めでは除けない、主さまの十字架という贖い、尊き血潮、これだけが世の罪を除くことができるということです。

「世の罪」とは何ですか。「世界の罪ですか」と、回りを見渡すのではありません。一人ひとりに対して、

「お前だよ、お前自身が罪なのだよ」

と言われるのです。人は、いろいろ犯したあやまちや、抱いた悪しき思いなどを罪ととらえます。それはその通りですが、その根っこの「我という存在」そのものがどうしようもないのですね。

「どんなに悔い改めても根っこはどうしょうもない。その根源を私は十字架で除く。それしかないのだよ」

と。それがイエス様のご生涯の最後の十字架です。

「父よ、この酒杯を取り去り給え。しかし、他に道がないのでしたら、私はみ心に従います。我に受くべきバプテスマあり」

とおっしゃいました（ルカ22・42）。

「血のバプテスマ」、これだけが私たちを本当に徹底的に、古き我、罪なる我から解き放って神様に結び合わせてくれる根源なのです。

その思いがヨハネ伝は深い。

「われ、かつて『わが後に来る人あり、我にまされり、我より前にありし故なり』と言いしは、此の人なり」（ヨハネ1・30）

人間の誕生としては、ヨハネは六ヵ月先にこの世に出てきました。しかしながら、イエス・キリストは、天界にて始めより在りし方だったのです。アブラハムより先に在し給うたお方、神と共に在りしお方、神の分身であられた方、そのお方が神の御座を捨ててヨハネの後を追って、この地に現れて下さいました。ヨハネは道を備えるために、先にいかなければならなかった。キリストはその後においでになった。しかし、存在としては「我より先に在りしお方」なのです。

「『われもと彼を知らざりき。されど彼のイスラエルに顕れんために、我きたりて水にてバプテスマを施すなり』ヨハネまた証をなして言う『われ見しに御霊、鳩のごとく天より降りて、その上に止れり。我もと彼を知らざりき。

されど我を遣わし、水にてバプテスマを施させ給うもの、我に告げて「なんじ御霊くだりて或人の上に止るを見ん、これぞ聖霊にてバプテスマを施す者なる」といい給えり。われ之を見て、その神の子たるを証せしなり』（ヨハネ1・31～34）

ヨハネがイエス様のことを、

「この人こそ世の罪を除く神の羔羊であり、この人の前で私は備えをしており、この人こそ聖霊でバプテスマを施すお方だ」

と断言できるのは、神様から示されていたからです。

「お前の処にいろいろな人がやって来る。その中でただ一人、バプテスマをお受けになった後、天界が開けて聖霊が鳩のごとく臨んでくるお方があるはずだ。その方こそお前の待っているその人だ」

と、啓示を受けていた。そのことが成就したのです。ここに書かれているのは、すでにヨハネはイエス様にバプテスマを施した後です。後から、これを証言しているわけです。だから、ヨハネの宣教というのは、すべて神様からの啓示によっております。人の知恵、人の思いではなかった。そして、はっきりとイエス様のことをこのように証言いたしました。

彼は「聖霊と火でバプテスマを施す者」ということで、四つの福音書に共通して書かれています。

主ご自身が本当にバプテスマを受けて我々の悔い改めを身代わりに受けとって下さった。そういう主イエスの投げ出しの姿、神様の前に己を投げ出しておられる姿。これに対して神様がお答えになったのが、

「祈りい給えば、天開け、聖霊、形をなして鳩のごとく其の上に降り、かつ天より声あり、曰く『汝は我が愛しむ子なり、我なんじを悦ぶ』（ルカ3・21）

というみ声だったのです。

全くイエス様というのは不思議なお方です。霊的には父と共に在りし方、万物の造られる始めより在りし方でありながら、人としてはそういうことは何も御存じないお方であります。子供の頃は全く普通のお子さんと変わらない。しかし、時々不思議なことがあり、ルカ伝では12才の時のイエス様のことが書いてあります。お宮参りをしてみんなそれぞれ自分の家路に着いたとき、イエスだけ一人ポツンと残って、律法学者たちと一日問答をし、絶対負けない。家族たちは先に帰って一日経って気がついてみたら、イエスがいない。さぁ大変だ、迷子になったと、引き返してみたら、大人を相手に問答をしている。

「私がお父様〔霊の父〕のお家にいるのが、どうしてお解りいただけないのですか」

「私は父の家にいます」と、不思議なことを言ったということがありました。それ以外は普通のお子さんですから、よけいに両親は戸惑っていたわけです。イエス様がまるで神の子

であって、異質な存在だけであったら、はっきり認識はできましょう。

しかし、イエス様は見たところ、神の子だとわからない。回りの人もわからない。だから、つまずいたりしている。本当にわからない。隠されている。隠されたる神様なのです。

そういうイエス様の本質をキャッチするのはとても難しい。私たちは後の代の人間ですから、こういう福音書を通してキャッチできるのですが、当時の人たちにはなかなか分からないわけです。イエスご自身も当初はそんなにお分かりにならない。十字架というのは、だんだんとご自身の中ではっきりしていきました。しかし、神を求める切なる魂であられたことは間違いありません。宗派的にはエッセネ派というヨハネの系統におられたという学者もありますように、全くの大工仕事一本ではなかったみたいです。そしてやはり、イスラエルという宗教的民族の中でそれなりの訓練は受けられたでしょう。しかし、本当の意味の聖職者としての専門教育ではなく、大工として、ヨセフの子供として、兄弟の長男としてお務めをしておられた。

ところが魂の質が、本当に「砕けの質」なのです。神様の前に自分を投げ出しておられる質、それと祈り深いということです。誰よりも祈り深く、

「父よ、父よ」

と祈っておられた。天から下って来たお方であるだけに天を慕われました。我々も皆神の子だから、永遠を慕う思いがあります。

「山川草木（さんせんそうもく）　悉く仏性（ことごとくぶっしょう）あり」

と言われるように、我々の中にも仏性あるいは神性というものが宿っている。しかし、それはとても希薄です。ところが、イエス様の場合はそれがとても強く、何よりも霊なる父を慕い、父なる神との交わりを大切にし、それが主の性、本性になっています。そういうところが我々とずいぶん違います。ヘブル書4章15節に、

「イエス様は罪を犯すことを除いては、みな我々と一緒だ」

と書かれています。人の弱さを思いやることができる方、涙ある方、いろいろな苦労をなさった方です。しかし、30才で天界から聖霊のバプテスマを受けられた。これは伝道のためのバプテスマです。でも、その前にすでに深く祈っておられた時、幾度も、神の霊を受けておられたに違いありません。それがこのときに爆発して、公の伝道の生涯へと乗り出されるスタートとなりました。そしてこの後、直ちに御霊（みたま）によって荒野に追いやられ、そこで祈りの中で40日40夜、サタンと戦われるという試練がありました。

「聖霊を受けたからもうこれでハレルヤ、万歳！」

というわけではなかったのです。やはり

「この世の罪を除く神の羔羊（こひつじ）」

という使命が、どんなに重くて大変なことであるかということを、イエスご自身がこれから味わっていかれるわけです。

我々は石ころです。

「石ころからもアブラハムの子等を起こし給う」

という、石ころです。そして、主が我々のできない悔い改めの代わりに、悔い改めて下さっています。イスラエルの人たちのためには、ヨハネが一緒に悔い改めてくれました。

今度は、私たちのために、主ご自身がヨハネからバプテスマを受けて、悔い改めて下さっています。そして更にご自身が十字架で砕かれて、備えを終えて下さった。

だから、聖霊が臨んで来れるのです。世の罪を除く、わが罪を除く、我という罪を砕き給う主イエス・キリスト。聖霊と火のバプテスマは我々にとっては恵みのバプテスマであり、もはや審判のバプテスマではない。その消息をやはり一番深く語ってくれているのは、パウロの書簡であります。

●十字架による贖い

「神の御意によりてキリスト・イエスの使徒となれるパウロ、書をエペソに居る聖徒、キリストに在りて忠実なる者に贈る。願くは我らの父なる神および主イエス・キリストより賜う恩恵と平安と汝らに在らんことを。

讃むべきかな、我らの主イエス・キリストの父なる神、かれはキリストに由りて霊のもろもろの祝福をもて天の処にて我らを祝し、御前にて潔く瑕なからしめん為に、世の創の前より我等をキリストの中に選び、御意のままにイエス・キリストに由り愛をもて己が子となさんことを定め給えり」（エペソ1・1～5）

我らの願いもさることながら、神のみこころが出発点です。我らを神の子とする、キリストの中で、キリストを通して、我らを神の子とする。それが神様のみこころであります。主さまは直接に神様から、

「汝を愛しむ、我、汝を悦ぶ」

との御声を受けました。我々はキリストの中で、キリストに包まれて同じ御声を聞くのです。我々がどんなに悔い改めをしても聞けない。我々の悔い改めなんてたかが知れている。ヨハネはどんなにかこの悔い改めを迫り、人々は真剣に受けとりました。

しかし、本当の悔い改めは十字架が与えてくれている。十字架へ来れば、古き我はもう葬り去られています。「悔い改め」より徹底的な「砕け」なのです。それを主は下さる。だから、私は十字架、十字架と言うのです。

「是その愛しみ給う者によりて我らに賜いたる恩恵の栄光に誉あらん為なり」（エペソ1・6）

神様のなさることは徹底的で、中途半端ではない。絶対なのです。だから、ラザロのところで話しましたように、望みにおいても徹底的に光なのです。相対的な我々がどうなろ

うと、そんなことはぶっ飛ばして、そこに光がすっと入って来て、生命に溢れしめます。そういう宇宙的な次元のものすごいものを、我々石ころの中に成就して下さる。これが神の愛なのです。そういう次元から、エペソ書は書かれています。パウロは獄中にありながら、祈りの中で霊界の高い処に引き上げられ、そこから告白させられています。

「我らは彼〔キリスト〕にありて恩恵の富に随い、その血によりて贖罪、すなわち罪の赦を得たり。

「罪の許しを得さするバプテスマ」といいましても、水ではなくてこのキリストの血のバプテスマ、キリスト自らがお受け下さった血のバプテスマによって、罪の贖い、すなわち罪の赦しを得たりと。

神は我らに諸般の智恵と聡明とを与えてその恩恵を充しめ、御意の奥義を御意のままに示し給えり。即ち時満ちて経綸〔ご計画〕にしたがい、天に在るもの地あるものを悉くキリストに在りて一つに帰せしめ給う」（エペソ1・7～10）

すなわちパウロは、

「私たちは滅びゆく相対的存在でありながら、同時に主に在りて、滅びざる永遠なる天の栄光を一身にいただいている存在にさせられた。天と地が一如になった。これは主イエス・キリストの御業なり」

と告白しているのです。

「我らは、凡ての事を御意の思慮のままに行いたもう者の御旨によりて預じめ定められ、キリストに在りて神の産業とせられたり。これ夙くよりキリストに希望を置きし我らが、神の栄光の誉となならん為なり」（エペソ1・11～12）

我々は今や、審きの対象として滅びに定められた者ではなく、神様の栄光の誉れ、

「我なんじを悦ぶ」

という御声の対象になったのです。

神様は我々を悦び給う。いや、神様はご自身の悦びのために我々を新創造して下さったのです。

初めの創造もすべてよく、神は満足されて安息日を迎えられた。ところがその後、狂ってしまいました。それをもう一度、私たちを以前よりも増した素晴らしい新創造へと、キリストにおいてなして下さいました。だから、神の産業、神の御業、神の悦び、神の栄光なのです。

「汝等もキリストに在りて真の言、すなわち汝らの救の福音をきき、彼を信じて約束の聖霊にて印せられたり」（エペソ1・13）

十字架の贖いの無条件の福音を、

「本当にありがとうございました」

と、全身で受けとったその時に、神様より約束の聖霊を賜わりました。つまり、神様の方から聖霊をもって答えて下さいました。

「これ〔聖霊〕は、我らが受くべき嗣業の保証にして、神に属けるものの贖われ、かつ神の栄光に誉あらん為なり。

こういうわけであなた方の信仰、また愛を聞く度にわたしは感謝し、そして、いよいよ深くあなた方を祈りに覚えている。我らの主イエス・キリストの神、栄光の父、汝らに智恵と黙示との霊を与えて、神を知らしめ、汝らの心の眼を明かにし、神の召にかかわる望みと聖徒にある神の嗣業の栄光の富と、神の大能の勢威の活動によりて信ずる我らに対する能力の極めて大なるとを知らしめ給わんことを願う」（エペソ1・14～19）

あなた方がこの「望み」と「栄光」と「能力」とを体得させていただくようにと。この「能力」とは、

「神が十字架の後に黄泉の国へ行かれたキリストの中に働かれて、キリストを死人の中から甦えらせ給うたその御力のことだ」

というのです。

「神はその大能をキリストのうちに働かせて、これを死人の中より甦えらせ、天の所にて己の右に坐せしめ、もろもろの政治・権威・能力・支配の上に置き、この世のみならず来るべき世においても唱えられるあらゆる名の上に置き給えり。万の物をその足の下に服わせ、彼を万の物の上に首として教会に与え給えり」（エペソ1・20～22）

神に贖われた者の群れ、召された者の群れ、召団

一人ひとりの霊が神様の贖いを受けて神のものとされ、それが吸い寄せられるように集ってくる、その群れ。

「二、三人我が名によりて集う処に我もあるなり」

とおっしゃる小さな群れ、また大きな群れ、すべてキリストの大きなエクレシヤ〔召団〕の一部をなしています。そういうものの首はキリストです。

●主の御業

「汝ら前には咎と罪とによりて死にたる者にして、この世の習慣に従い、空中の権を執る宰〔サタン〕、すなわち不従順の子らの中に今なお働く霊の宰にしたがいて歩めり。

霊の首魁であるサタンの蹂躙するままに手玉に取られていた。

我らもみな前には彼らの中におり、肉の欲に従いて日をおくり、肉と心の欲するままをなし、

自由を謳歌したけれど実は、それはサタンの術中に入っていた。

他の者のごとく生れながら怒の子

神の審判の臨む対象、

なりき。されど神は憐憫に富み給うが故に我らを愛する大なる愛をもて、咎によりて死にたる我等をすら、キリスト・イエスに由りてキリストと共に活かし（汝らの救われしは恩恵によれり）、共に甦らせ、共に天の処に坐せしめ給えり。これキリスト・イエスに由りて我らに施したもう仁慈をもて、その恩恵の極めて大なる富を、来たらんとする後の世々に顕さんとてなり。汝らは恩恵により、信仰によりて救われたり。是おのれに由るにあらず、神の賜物なり。行為に由るにあらず、これ誇る者のなからん為なり」（エペソ**2・1〜9）**

ですから、さきほどの悔い改めと申しましても、本当に我々の側から出る悔い改めは不徹底であります。その奥に本当に主ご自身が、

「お前の罪は私が背負ったから大丈夫だ、私に委ねなさい」

という御声をもって全うして下さいます。

悔い改めさえも我々の側で百%にはできない。初めから終わりまで主さまが全うして下さいます。そこに全面的に委ねまつり、

「主さま！」

と叫ぶ祈り、ただ一言「主さま」と、それだけです。

この尊い主の救い、歴史的にはヨハネが備えをして、主が来られたという順序ですが、今の我々には、

「本当に主さま、あなたはすべてを全うして下さいました。初めから終わりまであなたの御業であります。主よ、どうぞ、あなたの十字架を深く受けとらせて下さい。

「我主と共に十字架せられたり、我もはや生くるにあらず」

というその事態へと私を限りなく深めて下さい。そしてそのとき、御声を下さい。

「汝は我が愛しむ者なり、我、汝を悦ぶ」

と。そのみことばの中に包んで下さい。どうぞ、あなたの御用に役立たせて下さい。あなたの御栄光となさしめて下さい。このエペソ書が言っているような本当にこんな素晴らしい次元へと限りなく、あなたの恵みの御手をもって導いて下さい。行為によるにあらず、誇るもののなからんためなりです」

との祈りです。もし、人間の側の悔い改めの度合の深さが救いの条件だったら、「あの人はまだ悔い改めが足りない。私の悔い改めは徹底している。あの人はまだ砕けていない」と、そういう形で人を批判したり、また、悔い改めを測る尺度が出て来たりして、人を審いたり、己を誇ったりいたします。しかし、徹頭徹尾、初めから終わりまで、キリストの御業である、

これが

「**恩恵(めぐみ)により、信仰により救われた**」

ということであります。

「**これ己に出るにあらず、神の賜物(たまもの)なり**」

と、己から出ているものは一つもない。親鸞は、

「信心(しんじん)さえ賜(たまわ)りたる信心だ」

と言いました。悔い改めさえ、神の賜物である。極まるところは十字架である。

「**行為(おこない)によるにあらず、これ誇るもののなからんためなり**」

です。

「**我らは神に造られたる者にして、神の預(あらか)じめ備え給いし善き業(わざ)に歩むべく、キリスト・イエスの中に造られたるなり**」（エペソ2・10）

神様が今度は私たちを導いて善き業(わざ)をなさしめ給う。「愛によりて働く信仰」とパウロがガラテヤ書で言いますように、もはや肉の業をかなぐり捨てて、本当に神様の悦(よろこ)び給う、愛(いつく)しみ給う、「汝を悦ぶ」とおっしゃったその事態へと、我々自身がどんどん変えられていく。これは神の御業(みわざ)であります。我々は一心に主キリストを見つめ、主キリストの御名(みな)を呼び、その中にいつも飛び込んでいく。そうすれば、御力(みちから)が働いて我々を変貌させていって下さいます。

〔奥田昌道先生講筵2『主は我が牧者』１９９４年12月24日発行より転載〕